

スクールカウンセリングの多面的活用に関する一事例 ロールプレイを用いた授業実践から

A Case Study of Diverse Applications of School Counseling;
Using Role Play in the Classroom

今 村 友 木 子

Yukiko Imamura

要旨：スクールカウンセラーの活動に対しては現在さまざまな期待が寄せられており、狭義のカウンセリングだけではなく、広く学校教育現場全体を援助する取り組みが求められている。本論文では、筆者がスクールカウンセラーとして活動している中学校における事例をもとに、スクールカウンセラーの多面的活用の可能性について検討する。

また現在、学校教育現場は学校内外の垣根を取り払い、さまざまな面において柔軟な教育活動をするように変わりつつある。その中でも平成14年度から本格的に導入される「総合的な学習」は、学習テーマの設定の時点から教育現場に任せられており、各現場での創意工夫が求められている。スクールカウンセラーの活用もまた現場の判断に委ねられるものであり、この自由度の高い二つの活動をつなぐことによって、相乗的な効果も期待できる。本事例においては、「総合的な学習」の中でスクールカウンセラーが行なったロールプレイを用いた授業について報告し、スクールカウンセリングと「総合的な学習」の相互活用による効果について考察する。

I スクールカウンセリング制度とスクールカウンセラーの役割

平成7年度から開始された文部省スクールカウンセラー活用調査研究事業は平成12年度で6年目を迎えた。これまでのスクールカウンセラーの活動は全国的にも評価が高く、「活用調査研究事業」は「制度」への転換期を迎えている。スクールカウンセラーの具体的取組については様々な事例研究が報告され、児童・生徒、保護者、教師への心理的援助（カウンセリング）の過程に関するもの、養護教諭や教師との連携に関するものが多く見られる。また最近ではスクールカウンセリングの基礎となる理念を提唱する書物も相次ぎ出版されている（氏原・村山 1998, 岡堂 1998）。また学校教育相談全体のあり方を巡る議論も活発化している（石隈 1992,

大野 1997・1998)

スクールカウンセリングはこの学校教育相談の機能の一つとして位置づけられている。学校現場において、教師が学校教育相談やスクールカウンセラーについてどのような意識を持っているのか、「教員の学校教育相談についての意識調査」(日本学校教育相談学会 1994) からとりあげてみたい。

〈学校教育相談をどのように考えているか(複数回答・出現率)〉

①主として指導に困難を感じる児童生徒を対象とする	395(19.7%)
②すべての児童生徒を対象とする	1457(72.7%)
③主として相談室における関わりをいう	106(5.3%)
④日頃の学習指導や特別活動と密接な関係を持つ	1163(58.0%)
⑤教育相談の研修を積んだ一部の教師の活動をいう	58(2.9%)
⑥休み時間や放課後など、教師のすべてがかかわり密接な関係をもつ	1120(55.9%)
⑦管理・訓育的指導を否定し、気持ちや行動をひたすら受容する関わりをいう	297(14.8%)

この結果から、多くの教師は学校教育相談を「すべての児童生徒を対象とし、日頃の学習指導や特別活動と密接な関係を持ち、休み時間や放課後など、教師のすべてがかかわり密接な関係を持つ」ものとして捉えていると考えることができる。

またスクールカウンセラーへの教師の期待としては、具体的に次のような役割が求められている(森川 1998)。

- ①問題行動を持つ子どもに対する対応(教師へのコンサルテーションや関係機関との連携などを含む)
- ②子どもとのカウンセリング
- ③親(保護者)との相談
- ④校内研修会・特別授業・保護者対象の講演会の開催等
- ⑤その他

このようにスクールカウンセラーに求められているものは、狭義のカウンセリングのみではない。広く学校組織全体を援助していく多面的な機能である。そして広く児童・生徒に働きかける活動は、スクールカウンセリングの単独活動としてではなく、その学校の学習活動や教育相談体制を含む学校教育全体の流れの中に適切に位置づけていく視点が重要であると考えられる。

Ⅱ 「総合的な学習」におけるスクールカウンセラー活用の可能性

平成10年12月に告示された新しい学習指導要領では「生きる力」の育成が全面に掲げられて

いる。生きる力を育てる教育とは「自ら学び自ら考える力を育てる教育」であるとされ、正義感・倫理観、思いやりの心などの豊かな人間性や社会性を育むことも強調されている。そして具体的な取り組みとしては「体験的学習・問題解決的な学習を重視」「道徳教育の充実」「体育・健康教育の充実（心の健康を含む）」など、児童・生徒の心理的社会的発達への援助が非常に重視されているのである。こういった取り組みを実現する手だてとして「総合的な学習」という新しい学習時間が導入され、実際的な運用は個々の学校が独自に創意工夫を生かして取り組むことが求められている。

従って、新学習指導要領では、これまで「心の教育」とよばれていた活動を「総合的な学習」という形で正規の学習活動の中に盛り込むことが可能になったといえることができる。

そしてまた一方では、スクールカウンセラーの充実、心の相談員の充実も進められている。このように学習活動の面からも、学校教育相談的な心理的援助の面からも、児童・生徒の心理的社会的発達への援助を図っていこうというのが、現在の学校教育の流れである。

学習活動とスクールカウンセリングなどの心理的援助活動は、異なる側面から児童・生徒に働きかけるものであるが、その両面が一体化した取り組みや、一方を他方に取り入れた活動も可能であろう。「総合的な学習」の形態は非常に柔軟なものであることから、様々な工夫が考えられる。

ここでは、総合的な学習におけるスクールカウンセラーの活用事例として、ロールプレイを取り入れた授業について報告し、スクールカウンセリングの多面的活用についての可能性を探ることとする。

Ⅲ 「総合的な学習」におけるスクールカウンセラー活用事例 X中学校の取り組み

(1) X中学校におけるスクールカウンセリング

筆者がスクールカウンセラーとして配属されたX中学校は、Y県の都市部に位置する公立中学校である。在籍生徒数は各学年100名前後であり、やや規模の小さい中学校といえる。筆者が配属された平成Z年4月は、文部省スクールカウンセラー活用調査研究事業も数年目に入り、スクールカウンセラーの活動に対する評価は概ね好評ということで安定しつつあった。

X中学校では、スクールカウンセラーに対し、「保護者、教師への援助及び、教師のカウンセリング能力向上の為の援助」を当面の中心的任務として期待し、また「生徒へのカウンセリングは、スクールカウンセラー独自の活動と言うよりも、X中学校の教育相談体制の一つとして考え、様子を見ながら行うこととする。」との方針が示された。筆者はこれらの期待や方針に沿って活動を開始することとなった。

特に活動開始当初は、教師・スクールカウンセラー間の個別面談、教師への随時の相談活動、X中学校教育相談体制充実へのアドバイスなど、教師との関わりを中心におき、保護者、生徒

の面談はごくわずかであった。

2学期には「生徒とも直接関わって欲しい。」という声が教師との面談のなかで聞かれたこともあり、徐々に生徒たちにも接する機会を設けることを考え、スクールカウンセラー便りを発行し始めた。またスクールカウンセラーだけでなくすべての教師が相談を受け入れるという体制での教育相談の呼びかけを行ない、生徒からは少数ながら相談の申し込みがあった。12月に入ると、様々な生徒について教師から相談を受けることが増加した。これまでに培ってきた教師との円滑な相互コミュニケーションによって率直な意見交換ができ、また保護者へのサポートもスムーズに行なうことができた。

一方、それほど深刻な問題を抱えていない様子の生徒も、ふらりと本を借りに相談室を訪れることが増え、相談室の書籍を充実していくことや多くの生徒達への「予防的活動」を行なっていく必要性が感じられた。

3学期には1年間のスクールカウンセラー活動報告として、冊子を編集、発行した。これに先駆け、全教師を対象に、スクールカウンセラーの活動に関するアンケートを実施し、この回答を「教師から見たスクールカウンセラー」として冊子に掲載した。

アンケートの回答からは、X中学校の教師全体がスクールカウンセラーを好意的に受け入れ、活動を肯定的に評価していることが示された。また今後については、「心の教育の面から、特活や道徳、総合的な学習などの授業にもきっかけを作って入って欲しい。」「より多くの生徒と接してほしい。」といったように、幅広い活動への期待や要望が示された。

これを受けて、スクールカウンセラーはどのように生徒への活動を広げていくのか、生徒全体に心理教育的に関わりとしてはどのような具体的な取り組みが考えられるのか、検討が必要であることを強く感じた。

(2) 「総合的な学習」へのスクールカウンセラーの参加

【会議（校内教員研修）への参加】

上述のように、今後の生徒全体への心理教育的関わりをいかに実践するかについて思案をはじめた頃に、1年生の「総合的な学習」指導プログラムについて、校内教員研修の時間に話し合いが行われた。この会議において、以下のような指導プログラムが示された。

- 1 プログラム名 身近なお年寄りと共に生きる
- 2 ねらい 現代社会が抱えている高齢者福祉の問題を知り、身近な社会に働きかけ、人間として共に生きていくために自分にできる事を考え行動する。

(中略)

7 本プログラムの内容

- ①高齢者問題への意識を高める道徳の授業
- ②高齢者問題の現状を知る総合的な学習の時間（ビデオ視聴、高齢者疑似体験）

③介護福祉士の話聞く会

④高齢者とふれあう体験活動

(地域の独居老人をコミュニティーセンターなどに招き、交流会を開く。)

会議においては、X中学校の「総合的な学習」で高齢者問題を取りあげる意義や既に進められているプログラムにおける生徒の反応などについて意見交換がなされた後、「高齢者とふれあう体験活動」についての不安の声が聞かれた。不安とは「家族・教師以外の大人とあまり接したことがない中学1年生の生徒らが、上手に高齢者とふれあうことが可能か。相手に不快感を与えるような活動にならないか。また、相手も気持ち良く言葉を返してくれるお年寄りだけとは限らない。予想外の相手の態度にどう対応するのか。」といったコミュニケーション能力についての不安が中心であった。

スクールカウンセラーは、この話し合いを眺めつつ、スクールカウンセラーとしてどのようにこのプログラムを援助できるかについて思索を巡らせ、以下のような内容の発言をした。

「生徒らのコミュニケーション能力の問題について、スクールカウンセラーはロールプレイなどを用いて援助する事ができると思う。例えばロールプレイでは、小グループでのふれあい活動を想定して、老人役、交流する生徒役などの役を生徒に割り当て、『こんにちは、はじめまして』といった最初のあいさつの場面や自己紹介を通したやりとりなどを演じさせる。このロールプレイを通じて、『このようなあいさつのしかたでよいか』『どうしたら、もっとよいものになるか』『聞いている態度はよかったか』『よい態度とはどんなものか』といったことを、体験的に学ぶ事ができるだろう。こういったコミュニケーションのトレーニングは、単に今回的高齢者とのふれあい活動において役立つだけでなく、家族とのやりとり、家族以外の大人とのやり取り、友達同士のやりとりなどあらゆるコミュニケーション場面にも適用できるものである。またこの機会にスクールカウンセラーが授業などに参加する事によって、生徒達にもっと身近にスクールカウンセラーという人間を感じてもらいたい。」

この発言に対する反応は肯定的なものであり、会議後、「総合的な学習」の計画を中心的に進めている教師（以下、担当教師）から、「ぜひ具体的に話し合いたい。」との申し出があり、次週から打ちあわせを開始した。

【打ちあわせ】

第1回打ちあわせ：これまでの「総合的な学習」の進行状況や生徒の反応などを担当教師から聞くとともに、スクールカウンセラーが想定しているロールプレイについて説明した。話し合いの結果、スクールカウンセラーが1年生の3クラスにおいて、それぞれ1時限（45分間）の授業を行うことが決まった。45分間は短い印象を受けたが、それ以上の時間を取るには3クラス（約100名）まとめた実施という形になってしまう。100名を小グループに分けて統率していくのは非常に困難であると思われたため、それぞれのクラスで45分ずつの時間をとることとした。スクールカウンセラーの出動日には道徳の時間があることから、この時間をロールプ

レイを用いた授業にあてることとした。

第2回打ちあわせ：スクールカウンセラーからは「人との関わり方（コミュニケーション）の学習」授業計画案を提出し、授業目的及び具体的な授業計画を明らかにした。この計画案に対して担当教師からは、生徒の反応についての予想や、注意すべき点などのアドバイスを受けた。ロールプレイをおこなう際の具体的な班編成や教室の配置などについて話し合った。決定事項や授業計画案は担当教師から、1年生を担当する教師全員に伝達された。

【授業】

（X年3月2日 第2限1年A組 第3限 1年B組 第4限 1年C組）

最初の授業対象である1年A組は、「総合的な学習」担当教師の担任するクラスであり、おそらく普段からもっともこの授業に対して熱心に取り組んできたものと思われる。生徒達はよくスクールカウンセラーの言葉に耳を傾け、戸惑いつつも、ロールプレイを拒否することなく取り組む事ができた。授業は3クラスともほぼ同じ流れで行うことができた。以下に1年A組の授業の流れを記述する。生徒名、地名はすべて仮名である。〈 〉内はスクールカウンセラーの発言、「 」内は生徒の発言である。

① 授業目的の説明及びウォーミングアップ（5分～7分）

スクールカウンセラーとのあいさつ、隣席の生徒とのあいさつなどを通して、声を出すことや話すことに慣れ、この後のロールプレイにスムーズに取り組めるよう準備する。

知らん顔のあいさつ、にこやかなあいさつなどを意図的にすることにより、「知らん顔のあいさつ」で生じる不快感を実体験し、適切な態度について学ぶ。

隣席同士、あいさつを交わすように指示すると、教室は蜂の巣をつついたような騒ぎとなり、あちらこちらで笑い声があがる。騒がしさの中、「知らん顔のあいさつ」をするよう指示。照れ笑いが出てしまうものの、一応全員が隣席とあいさつを交わしている。

〈どうかな？知らん顔のあいさつをされるとどんな感じ？〉「え、笑っちゃう。でも、やな感じ。」〈田中さんは？〉「やだ。冷たい。」〈どんなあいさつがいいかな。〉「きちんと顔を見る。」〈そうだね。きちんと顔を見てあいさつすると、ずいぶん気分が違うよね。今日はこんな風に、他の人と言葉を交わした時にどんな感じがするか、というのに注目していきます。だから皆のなかにわいてきたいろんな感じが、大切なこと。今、照れくさくて、笑っちゃってやりにくいけれど、そんな居心地の悪さもまた“今感じているもの”としてよく覚えておいて下さい。〉

② ロールプレイ1 はじめましてのロールプレイ

設定：隣の中学校の中学生と交流することになった。初めて会う相手と自己紹介をして、話をしなければならない。どのように自己紹介し、相手の話をどうきけばいいのだろうか。

（6人1組：隣の中学校の生徒1名。X中学校の生徒3名。観察者2名。）

班ごとに分かれ、椅子を寄せ合って着席させ、ロールプレイ1の説明。教室前方にいる1班に、実際にロールプレイをさせて、ロールプレイのやり方を理解してもらう。また同時に1班

のロールプレイの様子について問いかける。

前田 「はじめまして。X中学校の前田です。」(隣の生徒を見て照れ笑い)

(沈黙、スクールカウンセラーから他の生徒もあいさつするよう促す。)

飯田 「はじめまして。X中学校の飯田です。」佐藤「佐藤です。(下を向いたまま)」

近藤 「隣の中学校の近藤です。」(下を向いたまま話す。)

(沈黙、居心地悪そうに、体をゆすったり、隣の生徒を肘で小突いたりしている。スクールカウンセラーは交流の為の会話を進めるよう指示。)

前田 「えーと、近藤君は部活は何ですか。」

近藤 「入ってません。」

前田 「えーと、趣味は何ですか。」

近藤 「マンガを読むことです。」

(この間、飯田と佐藤は下を向いて、くすくす笑っている。スクールカウンセラーがロールプレイを打ち切り、1班のロールプレイの様子について問いかける。)

〈どうだった？今のようないいさつでよかったかな。見ていた浅井さんどう思う？〉「顔をちゃんと見てなかったと思う。」〈石井君は？〉「声が出てなかった。」〈隣の中学校の生徒役の近藤君はどんな感じがした？〉「笑えちゃった。話しにくい。」〈ああ、そうだね。笑えちゃうね。皆も照れくさいし、笑えちゃうけど、がんばってそこをこらえてあいさつや自己紹介の練習をして下さい。じゃあ、それぞれの班で今やったように、役割を決めてロールプレイをして下さい。〉

生徒ら、各班ごとにロールプレイを始める。役割を決めるだけでも大騒ぎになっているが、何とか役を決めて開始する。どの役割の生徒も笑いながら、あるいは多少ふざけている生徒もいるが、ロールプレイを放棄するグループはない。誰かが何かを言うたびに笑ったり、肘をつきあったりする姿が目立つ。積極的に話をしない生徒もくすくす笑ったり、体を動かしている。スクールカウンセラーはグループの間を歩きつつ、〈今のはどんな感じがした？こっちの人達は笑ってたけど、あなたはどう感じた？〉〈見ていた人、今のでよかったかな？〉と問いかけて回る。

約7、8分後、スクールカウンセラーから全体に呼びかけ。

〈はい、ちょっとこちらに注目して下さい。自己紹介やってみてどうでしょうか。皆の様子を見ていて、気になることがあったので、一つここで皆のやっている自己紹介の様子を真似してみたいと思います。よく見ていて下さい。〉

担任教師と授業を参観していた他の教師の協力を得て、生徒一人とスクールカウンセラーも加わり4人でロールプレイを行う。生徒は「隣の中学校の生徒」の役、スクールカウンセラーと教師2人はX中学校の生徒の役を演じる。スクールカウンセラーがいくつか「隣の中学校の生徒」に質問をしたり、会話をしたりするが、その間教師二人は、ふざけあったり、肘を

小突いたり、全く関係のない話をして笑いあったりする。わかりやすいようにやや大げさに振舞う。

くさあ、今の自己紹介の様子、見ていてどう思いましたか？」「そっちの先生たちは関係ない話をしていた。」「笑ったりふざけたりしてた。」「そうですね、でもこれ、皆さんのさっきの様子をそっくり真似したものなんです。隣の中学校の生徒役の林さん、お話して、どんな感じがありましたか？」「こっちで話をしているのに、向こうで笑ったり、ふざけたりしているから、気になった。やな感じだった。」「そうですね、やな感じがしますね。今は皆初めてロールプレイということをやって、照れくさくていつも以上に笑ってしまったりふざけてしまったりしていると思います。けれどどうでしょう？実際の生活の中でもこんなことはありませんか？こちらの人が話している横で、ひそひそ別の話をしたり、体をくねくね動かしたり、くすくす笑いをしたりしていませんか？その時相手の人は、とっても“嫌な感じ”がしていますね？そういう相手と知り合って、仲良くなれますか？松井君どうですか？」「仲良くなれない。腹が立つ。」「そう。こんなふうにならぬか？で話をするときには、実際にしゃべっている人の態度も大切だけれど、しゃべらずに横にいる人の態度も大切です。どんなふうにしていて、相手がどう思うか、よく考えてみて下さい。そして、このことは隣の中学校だとか、お年寄りの交流会などの限られた場面で大切なのではなくて、普段のお友達同士の間でも大切なことです。クラスのお友達同士でも、自分が話している横でくすくす笑いをしていたり、ひそひそ話をしていたりしたら、どんな気分ですか？」「すごく嫌。」「そうですね、すごく嫌で、場合によっては仲間はずれにされているような感じや馬鹿にされているような感じを受けるかもしれません。人と話をするときの態度のなかで大切なことを覚えておいて下さい。>

くでは、今のことに注意をして、もう一度“はじめまして”のロールプレイをやってみて下さい。ロールプレイをやったら、各グループで今のロールプレイがどうだったか、きちんとやれていたか、大切なことは守れたか振り返って下さい。>

各グループが再度ロールプレイに取り組む。先の注意点が浸透し、くすくす笑いやふざけた対応などはほとんど見られない。

③ ロールプレイ2 お年寄りとの交流のロールプレイ

設定：交流会でお年寄りと生徒がグループを作り、お互いが自己紹介をして歓談する。

(6人1組：お年寄り役1名 生徒役3名 観察者2名)

くでは、今度皆さんはお年寄りとの交流会でお年寄りの方たちとお話をするわけですから、その様子をロールプレイでやってみましょう。お話の内容は自由です。今度お年寄りとの交流会でどんなことをお話するのか、想像しながら話してみてください。>

生徒たちは最初よりはスムーズに役割を分担し、ロールプレイに取り組む。「はじめまして、X中学の原田です。」といったあいさつの後、「おじいさんはどこに住んでいるんですか？」「子どもの頃はどんな遊びが好きでしたか？」「家族は何人ですか？」といったインタビュー的

な会話を中心にロールプレイを進めている。

スクールカウンセラーはグループの間をまわって、〈聞いている人の態度はどうか?〉〈お話ははずんでいますか?〉〈何が難しいですか?〉〈どうして会話が續かないんだろう?〉といった問いかけをおこなう。生徒たちからは「なかなか話が續かない。」「何を言えばいいのかわからない。」といった声がきかれる。

7, 8分後, スクールカウンセラーから全体に呼びかけ。

〈はい, そこで中断してこちらに注目して下さい。やってみてどうでしたか?〉「難しい。話が續きません。」〈そう, どうしてだろうね。じゃあ, また先生たちが皆さんのロールプレイの真似をしてみますね。よく見ていて下さい。〉

再び担任教師や他の教師に生徒役になってもらい, 生徒1名も老人役として参加。生徒役はややおおげさに話のつながらない質問を次々に老人役に対して発する。

生徒役 (教師)「おじいさんはどこに住んでいますか?」

老人役 (生徒)「中田町です。」

生徒役「趣味は何ですか?」

老人役「将棋です。」

生徒役「食べ物は何が好きですか?」

老人役「焼き魚です。」

生徒役「子どもの頃は何かをして遊びましたか?」

老人役「剣玉をよくやりました。」

生徒役「えーと, 次は何を聞こうかな?…」

〈はい, そこまでにして下さい。皆さん, どうでしたか? 今のお話の仕方はどう思う?〉「話がつながってない。」「どんどん関係ない話をしている。」〈そうですね, どんどん次の話題に移っていってしまいますね。皆の頭の中には, これを聞こうあれを聞こうというリストがあると思うけれど, こういう聞き方だと, あっという間に全部終わってしまって, 話題がなくなってしまいますね。では, 今度は先生がやってみますので, よく見ていて下さい〉

今度は担任教師が老人役, スクールカウンセラーが生徒役となってロールプレイを行う。

生徒役 (スクールカウンセラー)〈こんにちは。おじいさんはどこに住んでいますか?〉

老人役 (教師)「中田町です。」

生徒役〈そうですね, 中田町にはどれくらい住んでいますか?〉

老人役「うーん, もう50年くらいかな。」

生徒役〈じゃあ, 中田町のことはとても詳しいですか?〉

老人役「そうだね。」

生徒役〈中田町で一番好きなのところはどこですか?〉

老人役「緑公園は春になると桜がきれいだし, 中田神社は夏にお祭りをやるから楽しいよ。」

生徒役 〈お祭りは毎年行きますか？〉

老人役 「毎年行くね、孫たちも遊びに来るしね。」

〈はい、ここまでにしましょう。皆さん、今のお話はどうでしたか？〉「会話になってる。」「話がつながっている。」〈そうですね、話がつながってますね。どうして話がつながるんだろう？ さっきと何が違うんでしょうか。〉「相手の人が話したことに関係のある事を聞いている。」
 「一つのことについてずっと話している。」〈そうですね。次々に違うことを尋ねるのではなくて、一つの話題について話していますね。そして何か尋ねたら、それに対する答えが返って来て、またその答えの内容に関係したことを尋ねています。会話はこうやってつながっていくんですね。皆も普段お友達同士でしゃべるときは無意識のうちにそうやって会話を続けていると思いますよ。だけれど、初めての相手だと緊張してしまって『何か聞かなきゃ』『何か話さなきゃ』ということで頭の中がいっぱいになってしまいます。先生が今やったお話の仕方のなかで大事なことは何だと思えますか？〉「…」「わからない。」「相手の話に関係あることを尋ねること。」〈そうですね、相手の話に関係のある事を尋ねるんだけど、そのために一番大切なことは？〉「相手の話を聞くこと。」〈そうですね。相手の話を聞いていないと、それに関係のあることを尋ねることはできません。まず、相手の話をよく聞くこと。そしてその中から聞いてみたいなどと思ったことを尋ねていけば会話は自然につながっていきます。これも、お年寄りとの交流会だけではなくて、いろんな場面で他の人とお話をするときに応用できますね。〉

④ まとめ：全員を着席させてスクールカウンセラーが教壇に立つ。

〈今日は、皆さんにロールプレイということをやってもらって人と話をするときの場面を実際に体験してもらいました。照れくさくてやりにくかったでしょうが、全員がよく取り組んでいたと思います。では、最後にまとめをします。今日は「人と関わるときに大切なこと」を体験的に学びました。皆さんのなかで印象に残る大切なことは何ですか？指名しますので、それぞれ思い浮かべて下さい。〉

(1分ほど待って、想起させ、指名して発言させる。)

「相手の顔を見て話す。」「相手の気持ちを考える。」「にやにやしたり体を動かしたりしない。」「相手の話をよく聞く。」「相手の話に関係のある事を尋ねる。」「まじめに聞く。」「相手にとって不快な態度をとらない。」といったことが生徒から発表される。

〈そうですね、どれも大切なことです。そして、これらのことは今度のお年寄りとの交流会のためだけに必要なのではなくて、すべての人と関わる際に必要なことだということをよく覚えておいて下さい。〉

終了。

【生徒及び教師の反応】

・授業を観察した教師の反応（授業後のアンケートから）

「生徒たちは興味深く聞き入っていたと思うし、よい経験ができたと思う。今後もどんどん取

り入れていけるといい。お年寄りとか他の人の中には変わった方もいらっしゃるの、そういう時の対応などにも触れていけるといいと思うが、1時間では足りないかもしれない。生徒が意外にロールプレイに取り組めることに驚いた。今日の内容は生徒にとって非常にプラスになったと思う。このような機会を捉えてロールプレイをすると人との関わり方において有効だと思った。(教師A)」

「思っていた以上に生徒は反応していた。簡単なロールプレイはできるんだという印象を持った。相手の立場、考えていること、印象など実際に演じてみるとよくわかることが生徒にもうえつけられた。ロールプレイは難しいと思っていたが、様々な場面で有効であると感じた。職員間のロールプレイを是非やってもらいたい。それによって共通の理解(生徒指導、生徒の対応)が得られ、職員によって指導のばらつきが生ずるということもずいぶん減るのではないかと感じている。職員一人一人が様々な生徒に対しての同じ立場、状況で指導が可能になると思う。生徒が変化していく為には職員から変化していく必要がある。生徒をより深く理解する為に、我々が力を合わせる為にスクールカウンセラーの役割はものすごく大きいと感じた。(教師B)」

「恥ずかしがって取り組まない生徒がいることが予想されたが、ほとんどしっかりと取り組めたと思う。お年寄りとのことだけではなく、社会に出た時に必要なコミュニケーション能力という点を強調したことが、生徒の意欲付けになったと思う。グループで話し合ってたことが全体に伝わる場面(グループごとの発表)がもっとあってもよかった。ロールプレイは道徳の授業にも取り入れられるし、表現の能力、発言力を高めるためにも有効であるとは思っていたが、正直、中学生でも1年生の時期から慣れさせておけば十分できると、今日の授業で思った。スクールカウンセラーがこのような形で生徒に関わることについては、教師が気づかない視点での指導が期待できるので、今後も協力をお願いしたい。道徳の授業でのチームティーチングも考えられる。(教師C)」

「生徒が真剣に聞き入る態度から、授業の充実した内容を感じた。他学年でも機会を捉えてぜひお願いしたい。(教師D)」

・生徒の反応(生活ノートの記述から)

「自分が話している時に、後ろでコソコソ話されるのは不愉快だということがわかった。」
 「本番は相手の気持ちを考えようと思った。スクールカウンセラーに教えてもらわなかったらお年寄りに失礼なことをしてしまったに違いない。本当に助かった。」
 「スクールカウンセラーの話を聞くと、自分はダメな点ばかりだった。今日はとても勉強になった。」
 「スクールカウンセラーの指導で私はどういうことをしていけないかがわかった。もしこの指導がなかったら、『悪い例』が現実になっていたと思う。」
 「スクールカウンセラーに教えてもらったことを使って、お年寄りと楽しく過ごしたい。話のつなげ方は友達に対しても使ってみよう。」
 「スクールカウンセラーの授業は超楽しかった。最初私たちがとっていた態度は相手に失礼だということがわかった。本番はがんばりたい。」
 「スクールカウンセラーの話には気をつけなくてはいいな

いことがたくさんあった。自分ではわかっていたつもりだったけど、全然わかっていなかった。「最初は照れくさかったけど、教えてもらったことを使ってみよう。」

上記のように肯定的な感想が大半であるが、どのクラスも「スクールカウンセラーの話は難しかった。」「よく理解できなかった。」という生徒も数人いたようである。

IV 考 察

(1) ロールプレイを用いた授業について

ロールプレイはカウンセリング技法の習得のために広く用いられている。ロールプレイにはいくつかの大きな目的があるが、そのうちのひとつは文字どおり「相手の身になること」である。実際に特定の「他者」を演じ、その立場から即興で言葉を発していくことによって、演技者は他者の感情を理解できるようになる。このメカニズムを利用して役割交換法では、教師が生徒の役を演じ生徒が教師の役を演じることによって、教師は生徒指導のあり方を学び、生徒は教師の伝えようとしていることを学ぶといった効果を狙うことができる。また「いじめ」についても「いじめられる立場」を演じることによって、相手への思いやりの心を育むことができる。今回の授業でとりあげた「ロールプレイ1 はじめましてのロールプレイ」は、このように相手の立場に立って自分自身の行動や態度を見つめなおすことをねらいとしている。交流会を行うに先立って、当然教師からは「お年寄りに失礼のないように」「ふざけないように」といった注意は与えられるが、「失礼な態度」とはどのようなものであり、何がどのように不愉快な気分を生じさせるのかといったことは、口頭では伝えきれないほど様々なことがらを含んでいる。ところが、ロールプレイではそれらがまさにそのまま目前に示されることになる。ロールプレイ中で生徒たちが十分に気づくことができないならば、生徒たちのロールプレイをさらにそのまま模倣してみせるという2重構造のロールプレイによって、生徒たちは自分自身の姿をはっきりと見るのであり、生徒の感想にある「もしこの指導（ロールプレイ）がなかったら、『悪い例』が現実になっていたと思う。」というのはいままさに実感であろう。スクールカウンセラーと教師による模範演技の後、「もし今指摘されなかったら、交流会で、くすくすごそごそときっとやっていただろうと思う人、手を挙げて。」と呼びかけると、多くの生徒が神妙な顔で挙手し、その表情からはそれが表面的理解ではなく、深い共感を伴った理解であることがうかがわれた。

また、相手の立場に立つことによって相手の感情を理解するというだけでなく、今回の学習のような「事前学習」としての効果も考えられる。ロールプレイではたとえまだ体験していない状況だとしても、より豊かで具体的なイメージとしてその場の状況を想像することができ、その想像上の状況において起り得る様々な問題について深く考えることが可能になる。例えばロールプレイ2における「話をつなぐことが難しい」という問題は、頭の中だけで交流会の様

子を浮かべていた段階では気づかれない問題である。しかし実際に交流会の様子を演じることによって、「何を話せばよいかわからない」「話がつながらない」といった問題に気づくのである。このような主体的な経験によって気づかれた問題に対して、スクールカウンセラーはそれを解決するような模範演技を提供した。これによって、生徒らはまさに「話がつながっていく」ことを目の前で見たのである。時間的な関係でその後「話をつなぐ体験」を深めるまでにはいたらなかったが、本来ならばその体験も十分に共有するべきところである。

このように、ロールプレイによって演じることと見ることの両方を上手に活用することによって、生徒たちの自己理解、他者理解を大きく促すことが可能となる。

(2) スクールカウンセラーがロールプレイを行うことの意味

授業後の教師の感想には、教師がロールプレイの存在やその効果について知識として知っていながらも、実際に活用することに不安やためらいをもっていたことが示されている。教師自身がロールプレイの実践経験が少ないために、ロールプレイによる授業を実施することに不安を持っていることと、生徒たちの反応についても予測不能な部分が大きいということがその原因であると考えられる。

このことについて、スクールカウンセラーが常にその不安を乗り越える条件を満たしているとは限らないが、多くの場合教師よりはロールプレイの実践経験があり、ロールプレイによる授業を計画、実施しやすいであろう。また生徒たちの取り組みについても、ロールプレイによる授業の全体像を描きやすいために、ある程度生徒の反応を予測し対応を考えておくことが可能である。

上記の授業における生徒の取り組みはかなりよいものであった。戸惑いや照れによる笑いや私語は多く見られたが、ロールプレイそのものを拒否したり放棄する、あるいは他者のロールプレイを妨害するような行為はなかった。また繰り返しを重ねるうちに、スムーズに取り組み、問題を真剣に考えるようになっていった。こういった生徒たちの様子は教師にとって新鮮なものであり、「中学生でもロールプレイをすることができる。」「様々な場面で活用し得る。」という感想をもたらした。そして、今後、スクールカウンセラーではなく教師自身がロールプレイを活用する可能性も考えられる。実際に後日、「交流会のリハーサル」としてホームルームの時間に簡単なロールプレイを導入したクラスもあった。

また、生徒たちの授業態度の良さは「教師ではなく、普段は授業をしないスクールカウンセラーが一体どのような授業をするのか。」という好奇心による部分もあったと思われる。どのクラスでも、スクールカウンセラーの自己紹介やロールプレイ導入前の説明などの際、私語はなく集中して聞き入っていた。スクールカウンセラーが授業をするということ自体が、生徒、教師、スクールカウンセラーの三者にとって非常に新鮮な体験であったといえよう。

(3) スクールカウンセリングと「総合的な学習」の相互活用について

まず「総合的な学習」の視点からスクールカウンセラーの活用について考察したい。総合的

な学習は各学校が地域や学校の実態などに応じて創意工夫を生かし、特色ある教育活動を展開するものである。自ら学び自ら考える力などの「生きる力」は全人的な力であることを踏まえ、横断的・総合的な学習を実現することを目指している。従って、一つの学習課題をさまざまな側面から捉え直すことも重要である。例えば本事例の「身近なお年寄りと共に生きる」という学習課題は社会的な捉え方（高齢化社会）、国語科的な捉え方（敬語の使い方、感想文、手紙）、道徳的な捉え方（福祉）、保健的な捉え方（老化）などができるであろう。従来の学科で十分に学習しきれない部分は、介護福祉士を招いて話を聞く、など学校外の人材を積極的に活用することができるのもこの「総合的な学習」の特徴である。

このように柔軟な取り組みが可能な総合的な学習を、スクールカウンセラーは自身の専門領域である「人と人の関わり」という視点から捉えることができる。本事例では「身近なお年寄りと共に生きる」というプログラムにおける「交流会」の部分について、「人との関わり方」という視点からスクールカウンセラーにできる援助を提案し、実践した。ロールプレイというスクールカウンセラーの専門領域の技法を活かすことによって、教師、生徒、スクールカウンセラーの三者が新しい体験をすることができ、豊かなイメージを膨らませることによって「交流会」への意欲を高めることができた。スクールカウンセラーによる授業の2週間後に開かれた「交流会」の場では、生徒たちが地域の高齢者に対して誠意を持って接し、感想文からも相手を大切にしようとする気持ちがうかがわれた。また交流会にとどまらず身近な対人関係にも目をむけることが可能となった。

次にスクールカウンセリングの視点から、「総合的な学習」へのスクールカウンセラーの参加について考察する。すでに述べたように、スクールカウンセラーに対して求められているものは狭義のカウンセリングだけではなく、広く学校教育全体を援助する活動も含まれている。現場からの要請だけでなくコミュニティ心理学の立場からも、学校という一つのコミュニティを対象としてスクールカウンセラーがかかわっていくことの重要性が示されている（鵜飼 1997）。学校においてスクールカウンセラーがコミュニティ臨床心理士として働くとき、子どもの病的な側面を治療することばかりでなく、健康な部分を促進すること（開発的心理臨床）や、子どもが成長・発達可能な地域づくり（コミュニティ・コーディネーション）も、コミュニティ臨床心理士の大きな職責となる。

このような視点からスクールカウンセラーが学校コミュニティに関与しようとする場合、学校教育現場が全体としてどのような特色を持ち、どういった方向へ向かおうとしているのかといった動向や風土の把握がなされなければ、適切な援助を行うことはできない。それに加えて、どの程度の援助を学校側がスクールカウンセラーに求めているのかという点も重要である。

「過不足のない援助」は各々の現場によって異なるものである。実際にスクールカウンセラーが適切な活動をすすめていくためには、何らかの手がかりが必要であるといえる。

そういった意味において、本論で取りあげてきた「総合的な学習」は一つの有用な手がかり

となりうる。道徳や特別活動の時間を利用した「心の教育」の授業をスクールカウンセラーが行うことも可能であり意味のあることといえるが、そこでは通常の学習の流れと切り離されたスクールカウンセラー単独の授業になりがちである。一方「総合的な学習」に部分参加する形においては、学校教育全体の流れに沿った形でスクールカウンセラーの専門性を発揮することができ、学習課題をメインとしながらも生徒らの健康な部分に働きかけ、心理的側面の成長・発達への援助を行なうことが可能である。また「総合的な学習」においては教師・カウンセラー間の協力は不可欠であり、協力関係を通じて、教師・カウンセラー間の相互理解を深めることもできる。さらに、スクールカウンセラーが教壇に立つことにより、教師から見た生徒像や集団としての生徒の動きを直接に感じ取ることができる。

以上の通り、「総合的な学習」・スクールカウンセリングの両面における効果を検討してきたが、実際に「総合的な学習」にスクールカウンセラーを活用する際に問題となるのは、スクールカウンセラーの関与のあり方と、教師・スクールカウンセラー間の関係性やスクールカウンセラーへの期待などとのバランスであろう。

本事例においてスクールカウンセラーの関与が「交流会」の部分のみになっているのは、プログラムの内容が概ね決定した後にスクールカウンセラーが加わったという時間的な問題もあるが、教師集団とスクールカウンセラーの関係という面でも、「プログラム的一部分に参加」という形が当時の両者の関係とバランスがとれた関与のあり方であった。また「校内教員研修の場に普段からスクールカウンセラーの出席が認められていた。」「そのためスクールカウンセラーが新学習指導要領に関する説明の場に参加することができ、ある程度総合的な学習について理解していた。」「総合的な学習プログラムに関する話し合いの場に参加できた。」「スクールカウンセラー活用期間の1年目終了近くであり、既に教師集団と十分なコミュニケーションが成立していた。」ことなども、スクールカウンセラーの活用が円滑に行なわれた背景にある。

スクールカウンセラーがどの程度学校コミュニティに参入しているかによって、「総合的な学習」への関わり方は異なるものとなるであろう。スクールカウンセラーが学校コミュニティに入ってきたばかりであれば、「総合的な学習」についても初めは「参観」「コメント」の関与であるかもしれないが、「コメント」が次のプログラムの参加につながる可能性も考えられる。その時その場での無理のない関与のあり方が「総合的な学習」に限らず、スクールカウンセリング活動全体を通じて重要であるといえる。

参考文献

- 石隈利紀 1992 学校教育相談の基本的な考え方—学校心理学の枠組みから— 長谷川栄・杉原一昭 (編) 教職教育講座第5巻「生徒指導と教育相談」協同出版 116-131.
- 大野精一 1997 学校教育相談とは何か カウンセリング研究 30, 160-179.
- 大野精一 1998 教育心理学と実践活動 学校教育相談の定義について 教育心理学年報 37, 153-159.

- 大塚義孝 1996 スクールカウンセラーになるために こころの科学増刊 スクールカウンセラーの実
際 日本評論社 174-179.
- 日本学校教育相談学会 1994 日本学校教育相談学会研究紀要 4
- 氏原寛・村山正治 1998 今なぜスクールカウンセラーなのか ミネルヴァ書房